



自然を語る会

11月18日

レイチェル・カーソン 16章

参加者 13名

先月に続く『レイチェル・カーソン』の16章の続きだが、先月担当してくださった鈴木さんが今月にご都合が悪いため、岩渕さんがまとめてくださった。

『沈黙の春』の起源は執筆に着手する13年も前から始まる。レイチェルはメリーランド州における、DDT 散布の副次的な効果を検証する実験についての記事に関してリーダーズ・ダイジェスト社に問い合わせたが、取り上げてもらえなかった。その後ロングアイランドでのDDT 散布をめぐる裁判があり、またマサチューセッツ州での散布によって多くの鳥が被害を受けたことに対するオルガ・ハキンズからの手紙が直接的な執筆の動機となる。それぞれの場所を地図で確かめながら、実際のレイチェルの手紙等を読み合わせた。ロングアイランドの裁判では、育児書で有名なスポック博士の妹のマージョリー・スポックさんも大きな役割を果たした、マージョリーはレイチェルにその頃できたばかりのfaxで経過やデータを送り続けたため、faxが焼ききれてしまったというエピソードが披露された。

また、DDTは日本でも戦後すぐに散布された。上遠さんの父上はDDTで汚染された小麦を持ち帰られ、鶏のエサにしたそう。しばらくすると、鶏の産む卵の殻が柔らかくプルプルになってしまったという。その話を講演会でされた時、大阪の方ではその柔らかくなってしまった卵が普通の卵よりも安く売られていたと戦後の話を発言された参加者があったとのこと。このような実際の話を知ることもこの自然を語る会の魅力である。

DDTのみでなくマイクロプラスチック問題、侵略的外来種問題なども話題となった。

(文責：小川真理子)